

ま・な・び 記録帳

世界遺産のある町・萩①
『恵美須ヶ鼻造船所跡』

◆当時の時代背景など

江戸時代は、諸藩の水軍力を制限するため、幕府は大船の建造を禁止していました。しかし、嘉永六年（一八五三）のペリー来航によって、欧米列強に対抗するには大船の建造が必要と認識し、禁止令は撤廃されました。

そして、幕府はもとより、水戸・薩摩・佐賀など有力な諸藩が洋式軍艦の建造に取り組むことになったのです。

萩藩においても軍艦製造の検討がなされました。しかし、当時は相次ぐ風水害などで出費が増加しており、極度の財政難に陥っていたため、初めは消極的な姿勢を取らざるを得ませんでした。

この状況下、藩を動かしたのは木戸孝允（桂小五郎）でした。洋式造船技術を学んだり、造船所を視察したり、人脈を開拓したりして、準備を進めていったのです。

◆建造された二隻の軍艦 ◎丙辰丸（へいしんまる） 安政四年（一八五七）完成

ロシア式スクーナー
長さ 約二四・五m
↓マストは二本。進行方向
に対して帆を縦に張るス
タイル。

伊豆の戸田村（現沼津市）でスクーナー建造経験のある船大工、高崎伝蔵らを招いて建造しました。
★釘などの鉄は、大板山たたら場から供給されました。

◎庚申丸（こうしんまる）

万延元年（一八六〇）完成
オランダ式コットル
長さ 約四三・六m
↓マストは三本。進行方向
に対して帆を横に張り、
最後尾の帆だけ縦に張る
スタイル。

オランダ式造船技術を指導できる長崎の船大工駒次郎らを招いて建造しました。
★船の設計は、長崎の海軍伝習所で学んだ藤井勝之進が担当しました。

◆造船所にあった施設など



この広場に作業小屋が建ち
造船が行われていた

造船所の見取り図が残っているので、作業場などがどのように配置されていたかが分かります。現地を訪れると、それぞれの建物の推定位置が示され、幅や長さで規模を想像することができま

- ・絵図木屋：原寸大の図面を作成した原図場
 - ・切組木屋：図面から木形を作って木取りした部材を組み立てる場所
 - ・木挽木屋：製材場所
 - ・蒸気製作木屋：船材を入れて蒸す、蒸気箱を設置した建物（蒸し曲げはロシアの造船技術）
 - ・綱類製作木屋：綱類を製作した場所
- この他、鍛冶木屋・高崎伝蔵居所・大工居所などの表示があります。（木屋Ⅱこや）

◆世界遺産登録のポイント

萩藩の洋式船建造の歴史は、二隻目の庚申丸をもって途絶えます。それは、以後主にイギリス商人から蒸気船を輸入するようになったからです。

しかし、恵美須ヶ鼻造船所跡は、以下に示す理由で世界遺産の構成資産に選定されています。国内に同様の史跡がなく、とても貴重な歴史の証人だからなのです。

- ① 日本の造船近代化の最初期の様相を伝えている。
- ② 異なる技術（ロシア式・オランダ式）の造船を同じ場所で行った。



現存するのは石造防波堤のみ
ここは撮影スポットでもある

本格的な調査が行われたのは平成二一年度（二〇〇九）からということで、遺構が確認されるのはまだまだこれからでしょう。とても期待が膨らむ場所でもあります。

◇世界遺産の構成資産を 一緒に学びましょう！

平成二七年（二〇一五）七月に『明治日本の産業革命遺産―製鉄・製鋼、造船、石炭産業―』が、世界文化遺産に登録されました。

この世界遺産は、八県一市に分散する二三件の資産で構成することから、天守閣のような象徴的なものが見られないというものではありません。それは、日本が一九世紀半ばから二〇世紀初頭にかけての五〇年という短期間で、西洋の技術を吸収し、かつ国内の伝統的な技術と融合させ、急速な重工業の産業化に成功した…という過程に価値を見出しているからなのです。

つまり、日本の産業革命ストーリーを、各構成資産を巡りながら読み解いていくことに、この世界遺産の面白みがあると理解していただければと良いのだそうです。

萩市の構成資産は序章部分です。西洋技術を導入する必要性を感じ、試行錯誤を重ねる様子に思いを馳せながら、一緒に学んでいきましょう。